176

諏訪牟田遺跡

（日置郡金峰町大野諏訪牟田）

位置と環境

遺跡は，大野原台地の北端に位置し，北側は谷となる標高約50mの台地縁辺部にある。

調査の経緯

諏訪牟田遺跡は，農業大学校の研修棟やそれに付属する園池および幹線道路建設が計画される部分について，平成９～13年度に本調査を実施した。

遺構と遺物

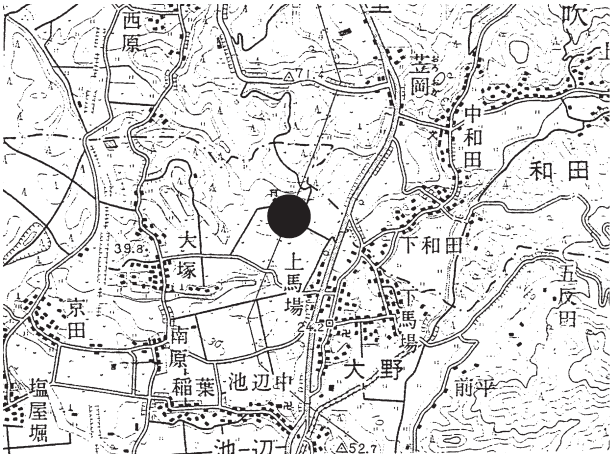
本遺跡は，縄文時代草創期から中世までの複合遺跡である。

縄文時代草創期では，集石遺構１基を検出し，周辺では無文土器や隆帯文土器・石器類がまとまった状況で出土した。

縄文時代早期前葉は，前平式土器が大量に出土した。その中には，これまで知られていた円筒土器や角筒土器のほかに，断面がレモン形をした土器の完形品もある。この地点では，集石６基とともに，加栗山式土器・吉田式土器・石坂式土器なども多く出土し，比較的長期間生活を営んでいたことが窺える。特に，石坂式土器は多く出土しており，この時期の生活環境に適していたことが判明した。

縄文時代晩期は，調査区全域から遺構や遺物が数多く出土した。土器は主に入佐式土器である。土坑は，大小35基を検出した。円形で比較的浅いもの，楕円形で深いもの，不安定のものなどがある。その内の３基は，埋土上部に縄文時代晩期後半から終期に噴出したと思われる開聞岳起源の灰ゴラの堆積が見られ，この時期以前の土坑であることが層位的にも明らかとなった。再生を祈ったと考えられている埋設土器は，３基を検出した。土器の底部を故意に打ち欠いており，日常の生活具を転用する際にこのような行為を行ったものと考えられる。これらの遺構が集中する地点では，土製の垂飾品や緑色の石で造られた管玉も見られた。また，石器製作所跡と思われるブロック１基を検出した。また，当該期と思われる竪穴住居跡も１軒検出された。

弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる竪穴住居跡２軒を検出した。平面形は円形と不定形なもので，張り出しを有するものである。



第１図　諏訪牟田遺跡の位置

写真１　前平式土器（レモン形）

古代～中世では，掘立柱建物跡１棟及び土坑・溝状遺構などを検出した。掘立柱建物跡は２間×３間のものがほとんどである。古代のものと，中世のものに分けられるが，今後の課題である。また，３面に庇を持つ２棟は，柱穴の埋土より出土した土師器から中世（鎌倉時代）と考えられる。なお，周囲からは「王」または「玉」の字のある青磁（宋）も出土した。

溝状遺構は，格子状の直交するものや平行して長く伸びていくものなどがある。本遺跡では，広範な面積での調査のために，全体の概要をつかむことができた。硬化面が検出できない点もあったが，遺構の配置などから，土地の境界または雨水の排水用などの目的のほかに，長い間道として使われて窪んだものもあると考えられる。時期は中世である可能性が高い。　（岩屋高広）